

幼児の人物画について(二)

一年齡差の表現―



青 木 隆

五 おとなと子ども

前回は藤沢市のある幼稚園で得たハリスの人物画検査の結果を中心にして、幼児がどのようにして男性像と女性像を描きわけているかについて述べたが、今回はおとなと子どもを区別して表現しているかどうかについて考えてみたいと思う。

おとなと子どもの外見上の相異点の第一は身長差である。

同一の画面におとなと子どもを同時に描くのであれば、画像の大小によって身長差を表示することも可能であるが、今回実施したハリスの人物画検査のように別々の画用紙にそれぞれの人物像を一つずつ描く場合には、三枚の画面における画像の大小関係という意識はうすく、まして、私の場合には出来上がった作品はその都度提出させてしまったので、三つの作品を直接比較

しながら描いてゆくということが不可能である。それゆえ画像の大きさは先に描き上げた画像と関連させて決定されるのではなく、個々の画面空間に対応するような適度な大きさに描かれたと見なすべきであろう。以上のような理由で、このような検査の実施法によって、幼児のおとなと子どもの身長差を表示する能力の有無について解答を求めようとすることは不可能であった。しかしながらごく少数ではあったが、一枚目の男性像・二枚目の女性像（いずれもおとな）は画面一パイに大きく描き、三枚目の自画像のみを画面中央に小さく描き表わしているものもあった。

同一画面内における場合のように、画像の大小によるおとなと子どもの表現が見きわめられないとすると、第二にあげる可能性として、人体のプロポーションの相異が残る。日本人のお

となはおおよそ6.5頭身から7頭身にあたりとされているが、幼児はおとなに比して頭部が大きい。幼児の描く人物画は実際の人体に比してはるかに大きな頭を描き表わす傾向が強く、個人差がかなりあるがその代表値は3頭身から4頭身の間にあり、この間と思われる。表1は藤沢市の前回とりあげた幼稚園における

図1 3頭身以上の画像の出現率

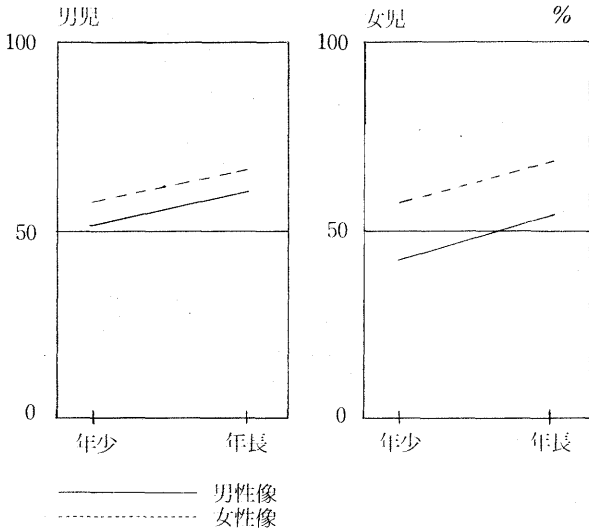


表1, 3頭身以上の画像の出現頻数

	年 少 組		年 長 組	
	男 児	女 児	男 児	女 児
N	57	43	58	48
男性像	29	18	35	26
女性像	33	25	37	33

標本(前号参照)で3頭身以上のもの——画像の全長の $\frac{1}{3}$ より小さい頭部を描いたもの——を示している。図1はその百分率が示してある。この例だけでは十分なことはいえないが他のデータなどから類推して、年齢が進むに従って身長に比して頭部の大きさは小さくなってゆくとと思われる。(児童期になっても実在の人体のプロポーションに比して頭部が大きいことは変りないが、その差が小さくなってゆく)またこの表には示されていないが、自画像との間に相異はなく、男性像・女性像の間にも男児・女児の間にも統計的な有意差はなく、3頭身前後の画像が多いように思われた。

(厳格な数値を算出した訳ではないので、偏差は不明。しかし3頭身から3.5頭身の間を平均値

とする正規型にちかい分布を示すように思われた)

以上のように幼児の人物画にあっては、おとなと子どものプロポーションの差に基づく区別を表示したものは見られないと考えられる。

それならば、どのようにして年齢の差を表示しているのだろうか。前回の表2に示したとおり、年長組では子どもとおとなを描きわけているものが20%ないし30%ある。これらは男女の性別を髪形や衣服によって表示したのと同様、これらに類するものによって年齢のちがいを区別させている。男児の場合はおとな(男性像)と子ども(自画像)とはネクタイの有無によって相異を示している。また女児では髪形によるものが多く、自画像ではおかつぱ・おさげ・ポニーテール、あるいはリボン飾りなどに、女性像ではカールした髪などである。

女児は男児に比して衣服の描写に優位であると述べたが、女児が衣服そのものによって年齢のちがいを描写している例が少なかった。実際最近の若い母親たちはミニスカートなどの流行もあって、特に様式的には女児の服装と大きな差異は認められないようである。たとえばワンピース・ブラウスまたはジャケットとスカートの組合せ・ジャンパースカートというような様式ではおとなと子どもの区別が成立しない。せいぜい肩つりの紐のあるスカートが少女らしいといえる程度である。これに反

し靴やアクセサリー、これに類するものには区別のつけやすいものがある。今回の標本ではわずかであったがハイヒールはしばしば見受ける。またネックレス・マニキュア等も散見する。小学生になるとこのような小道具の種類は多くなり、前記の他に、男性像ではタバコ・パイプ・腕時計・ゴルフのクラブ等で、女性像ではサロンエブロン・買物籠・ハンドバッグ等が見られ、共通したものとして眼鏡がある。幼児期の作品に多いものとして男性像のひげそりあとを表わす細かい描点も興味あるものの一つであろう。

以上のように幼児の人物画検査に現われた結果から判断すると、おとなと子どもを区別した表現は、幼児にもすで見られるという点を第一にあげることができる。そしてその表現方法はプロポーションの相異によるものではなく、髪形や衣服類の相異によって表示されている。しかし表現内容は全く断片的でありながらきわめて具体的であるということができよう。前回には性別の表現について、基本的な人体像が確立し、その上に細部的な操作をほどこすことによって男性像としたり、女性像としていると述べたが、次の段階として男性像・女性像はさらにそれぞれ子どもとおとなに分化して行く。……とみなしてよいであろう。そして表現方法は両者とも全く同一の形式であるといえる。けれども幼稚園の段階では半数以上はまだ年齢の相

異を十分に表現するに至ってはいない。

六 予備の実験

次に幼児の性別や年齢差の表現に見られたような表現様式をいっそう明確に知るために二・三の実験を試みた。

A 年齢のちがいをおとなと子どもというような対立する関係としてではなく、年齢を連続的な変化として五段階に分けて描かせて見た。対象は幼稚園児から小学校四年生までの十四名にすぎない。各自に画用紙(サイズB5)五枚を渡し次の課題によって描かせた。1赤チャン、2幼稚園児、3小学生、4高校生、5おとな。なお原則として男児は男性のみ、女児は女性のみとして、二、三名の小グループで実験を行なったが、お互いの作品が見えないように特に配慮した。

この結果からプロポーションの相異によって年齢のちがいを表現しているのは四年生に見られるだけであった。これらの作品は身長と頭部の比を年齢に対応して変化させるばかりでなく、年齢の低い画像は頭部をややひらいた丸顔にし、おとなになるに従って縦長の楕円にしている例もあった。しかしながら幼稚園児から二年生までは、人体の主要なプロポーション・頭部と身長之比・肩巾・脚の長さなど、年齢に対応する変化は見られず、まるでせかせかえ人形で遊んでいるのと同様に部分をとりか

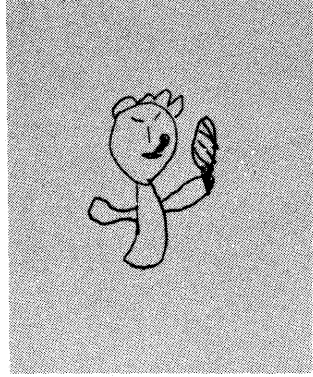
えて年齢の変化を表わしている。(写真1・2・3)

赤チャンはフリルのついた帽子・よだれかけで表わされ、以下幼稚園児は肩つりのある通園鞆・小学生はランドセル・高校生は手さげ鞆：というようなきわめて明確な一連の組合せを作って課題を解決していた。私は描画にさきだつてこの課題は幼稚園児にはもちろん小学校の低学年児にもやや困難ではないかと思い、一歳・五歳・十歳……というような教示をやめて、幼稚園児とか小学生というような身分を示す言葉に改めたほどであった。しかし実際には……私の読みが浅かったというか、いささか拍子抜けがする思いであった。またこのような一連の主題では、こちらが意図する目的が容易に被験児に察知され、描画にあつたつての留意すべき問題点が具体的に理解されており、人物画検査におけるより以上に年齢のちがいを描きわけねばならぬとする姿勢が感じられた。

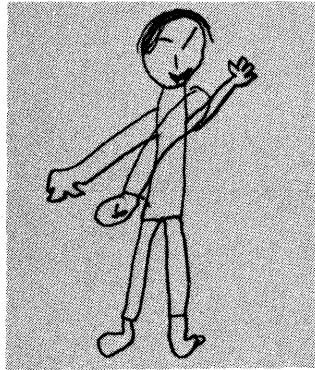
このささやかな実験で興味ある発見は、幼稚園児・一、二年生では人体のプロポーションは固定的といったが、赤チャンだけは例外で頭部を大きく表わしている。一年生の女児の一人は「頭が大きい方がかわいいから……」といていたが、私が想像している以上に「表現」という意識が育っているのかもしれない。



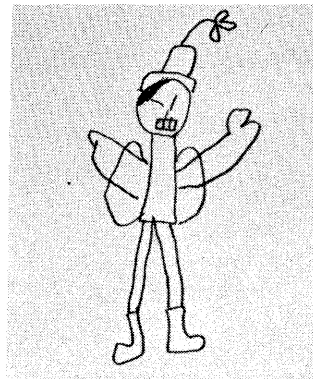
D



A



B

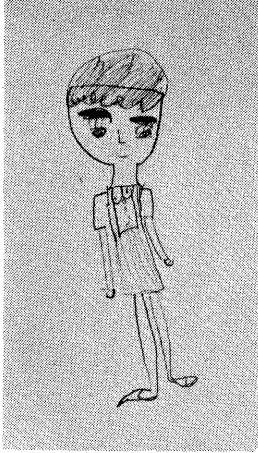


C

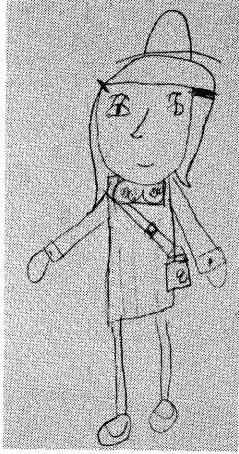
写真1

男児（6歳）幼、年長

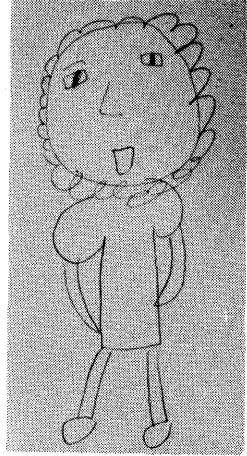
- A 赤ちゃん あめを持って舌を出している
- B 幼稚園児
- C 小学生、ランドセルのつりひも
- D 高校生



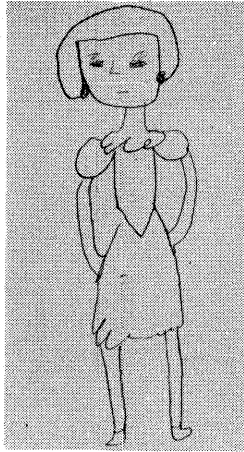
C



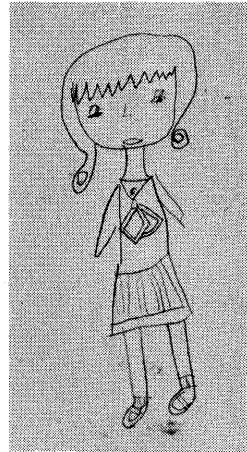
B



A



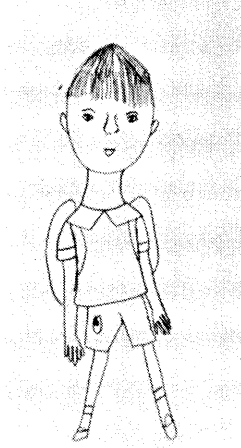
E



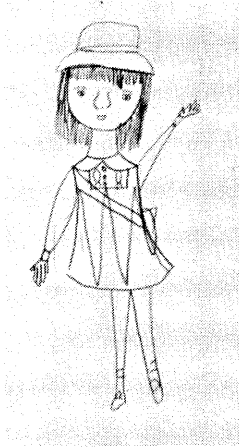
D

写真2
女兒(5歳)幼、年長

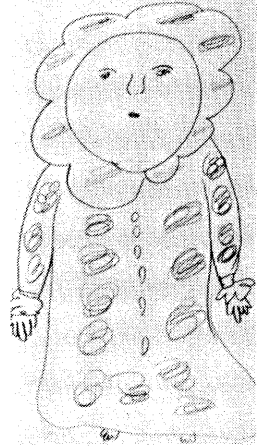
- A 赤チャン
- B 幼稚園児、制服
- C 小学生
- D 高校生、セーラー服
- E おとな



C



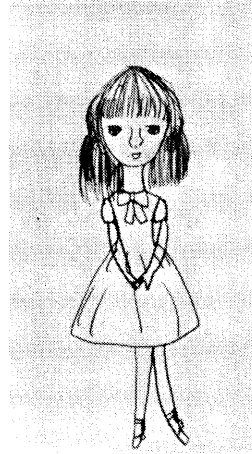
B



A



E



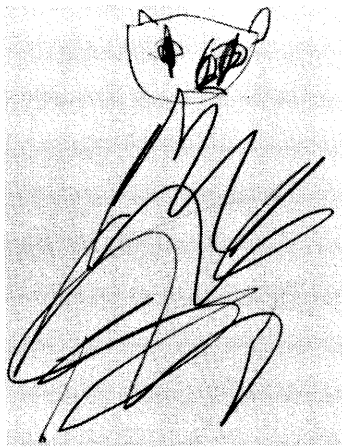
D

写真3
女兒（7歳）小、1年

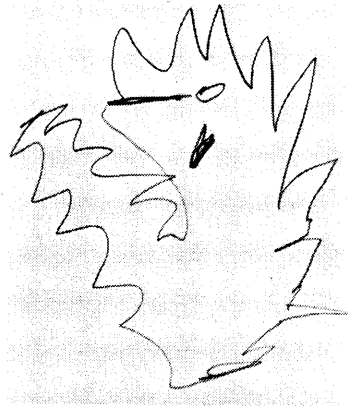
- A 赤チャン 頭部が他の像に比して大きい
- B 幼稚園児
- C 小学生、この像だけ男性
- D 高校生
- E おとな、エプロン

B この一連の連続的な年齢差を描きわけける実験と平行して、別の課題による描画を試みた。それは「いたずらっ子」を描くものである。最初はいたずらっ子と鬼または悪魔の二点を描いてもらったが、途中から一枚目を自画像として合計三枚とし、最終的には鬼、悪魔をはぶき自画像といたずらっ子のみにした。実施方法は前述のものと同様で、被験児は幼稚園から小学六年生までの約四十名である。研究の目的は一般的人間像に対立させて、特殊な条件が附加された人間像をどのように表現するかを知るためである。

細かい説明は省略するが、幼稚園・小学校低学年ではいたずらっ子と自画像の間に、次のような相異がみられた。1、毛髪をなぐり描きのように乱暴に描く。2、口を大きく描いたり、歯を描写する。3、目じりをつりあげて描く。4、鼻を大きく描いたり鼻孔を表わす。5、画像をことさらゆがめシンメトリをくずす。6、描線をことさら粗雑に描く、7、衣服のやぶれ、よごれを描写する……。などである。多くのいたずらっ子の画像はここに示した項目の一つかせいぜい二つを表示しているにすぎない。鬼・悪魔についてもこれと同様の傾向で特筆すべき点はないが、頭に角を描きさえすれば鬼を表示したことになる。年齢が進むにつれて大きな胴や肩、力こぶなどを描き表わす) — (写真4・5・6・7)



B



A

写真4

男児(4歳)幼、年少

ジグザグの描線やなぐり描きによって正常な画像と対比させている興味ある作品

A 悪魔(怪獣か)

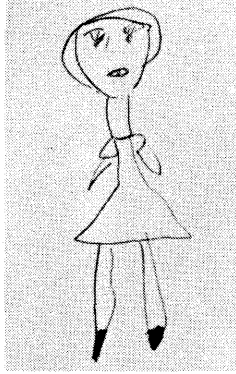
B いたずらっ子

写真5

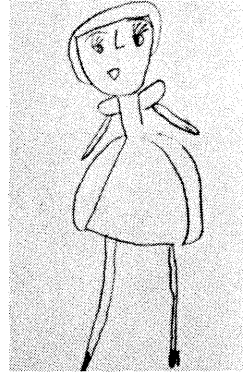
女兒(6歳)小、1年
全体像としてはまだ大きな変化はない

A 自画像

B いたずらっ子 口の中に
歯が見える



B



A

写真6

男児(6歳)
小、1年
人体のパターンは
同一、右自画像、
左いたずらっ子、
口を開いて歯が見
えている、描線が
やや粗雑になって
いる

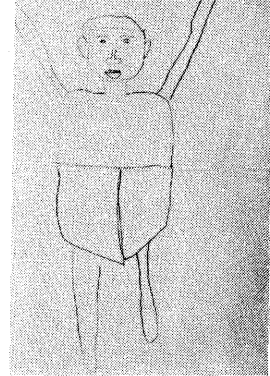
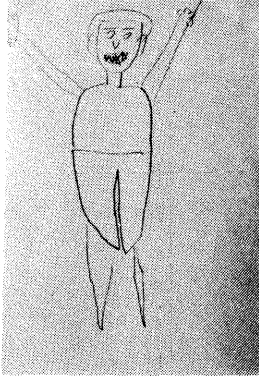
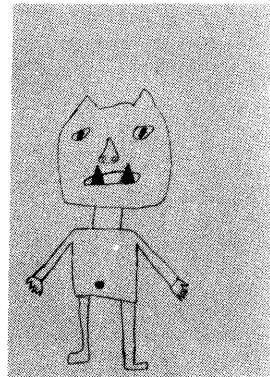
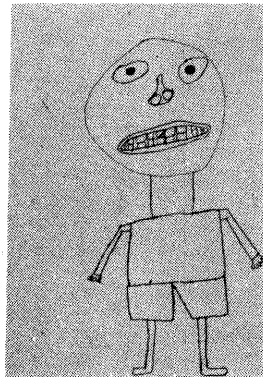


写真7

男児(6歳)
幼、年長
右鬼、左、いたず
らっ子



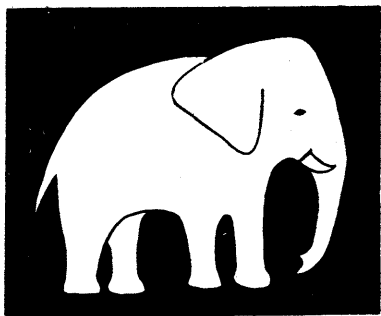
C 次にあげる例は描画活動そのものによる実験ではないが、関連があると思う。それは被験児に五枚一組からなる絵画を見せて、どれが一番好きかを聞き、以下好きな順に順位をつけてもらうものである。主題は少女・象・手・亀・自動車の五種類からなり、それぞれは五枚一組となっている。五枚の作品はいずれも写実的なものから単純化されたものへと五段階に區別出来るように描いた。(図2)

被験児は幼稚園児(年少・年長) 小学校一年生の男、女二十四名であった。実施方法は一対一、机をはさんで対座し、五枚のカードを横一列に並べ一番好きな絵から順にさしてもらった。そして再度最高位のもの、最下位のものを確認しその理由をたじた。カードの呈示方法は常に最も写実的な絵の位置が一定しているようなことがないよう、それぞれ呈示するカードの配列順序は一見ランダムであるかのようにあらかじめ決めておいた。

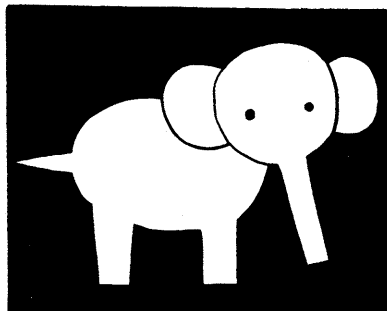
結論だけをいうと、幼稚園の年長クラスと一年生は写実的な傾向のものを第一にとりあげ、最も単純化したものを最下位にしている。これに反し年少クラスの段階では全く私の予定した順位とは関係のないカードから選んでいった。象は「目がかわいいから」といって選んだり、少女の像は「靴がいいから」「リボンがいいから」とかの理由で選ばれている。そして甲羅を細

かく描写した亀や、陰影をつけた手については気持が悪いといつてさけてしまう。年少クラスは部分の価値が全体像の価値と混同されているかのように思われたが、年長クラス以上が写実的な描写を指向しているかという点、これは疑問である。亀や象の絵では「脚の爪がちゃんと描いてあるから」という理由で写実的傾向のカードが選ばれている。そこで自動車の絵だけ他の作品とは異った内容をもたせておいた。写実的傾向の内容を二つに分け、一方は自動車のプロポーションをできるだけ正確に描き部分を省略し、他の全体のデッサンをくるわせ細部的な説明はなるべく多く描写しておいた。(図3、A・B)これに対してほとんどの年長グループ、一年生はプロポーションの狂った細部描写の多い作品(図3、B)を第一にあげ、「バックミラーやナンバープレートもハンドルもあるから」という説明を行なっている。

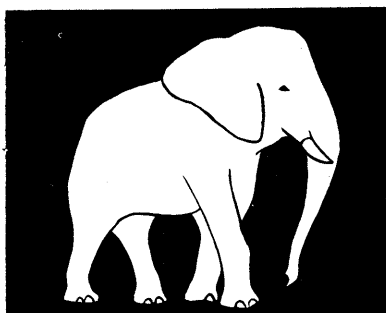
以上の結果から幼児期の絵の好みは年少の段階ではどこか一点だけ気に入るところが存在すれば、全体像の価値が決定されているかのように見受けられ、年長組になると好ましい部分の描写が多いほど好きな絵ということになり、そのさい全体像のプロポーションの狂いはさして重要な意味をもち得ず、選択の基準に関与していないかのようにさえ思われた。そして年少児と年長児とがそれぞれ選んだカードは相異していても、選択の



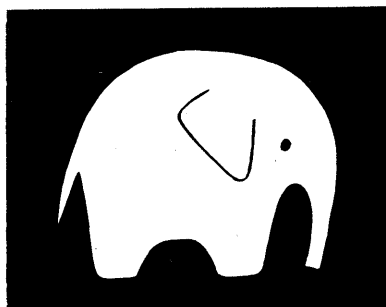
D



A

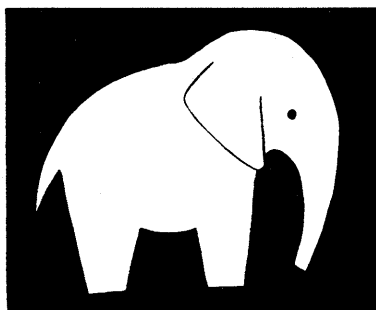


E

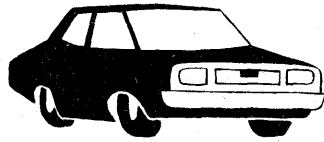


B

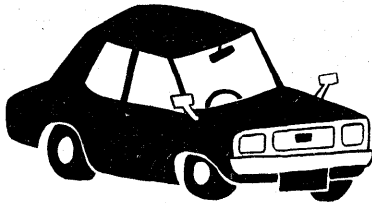
图2 象



C



A



B

図3
自 動 車

原理的な相異があるのではなく、単一な好ましい部分から量的なものへと発展しているにすぎないと見なしてよいであろう。ここに示した絵画の好みの選択基準も、描画における描写の発達の方向もきわめて類似した形式をもっているかのようである。この点に関しては今後十分な研究の積み重ねが必要であるが、今回の予備調査をよく再検討して発展させいずれ改めて詳細を報告したい。

なお、年少グループでは象の絵で図2、Bを第一順位に選んだものがなく、ほとんどが2、Aであり、第二として選ぶのはむしろ2、Cであった。年少児は理由を求めても「どうして〜。」と「すぎだから」とか返答になっていないものが多いが、目がかわいいという理由づけもかなりあった。それならば2、Bが選ばれる可能性もあるはずである。この疑問に対して私は次のように解釈してみた。図2、Aは脚や尾の区分が明瞭であるのに反し、図2、Bでは全体像を一つのまとまりとしてそのまま単純化しパターン化している。この相異から推して——年少児の好みをより一層分析してみないとわからないが——全体を構成する部分の区分が明快に説明されていることが重要な条件ではないかと考えてみた。

この絵の好みに関する予備的な実験は実は幼児の絵本についての基礎的な研究を進めるための準備でもあった。絵本の表現

様式は多種多様であり、絵本の新刊書の書評が一般の新聞に掲載されるほどである。しかしながら子どもの側からの評価をまとめた研究は発表されていないように思われる。そこで私は子どもの童画に対する評価や、その発達についても調査したいと思ひ、その端緒として上記のような実験を行なつた訳である。上記の実験と同時に同年齡の小グループを作つて実際に刊行されている絵本を見ながらブレンストーミングのまねごとをしてもらつた。私が選んだ絵本は日本・スイス・イギリス・ドイツ・アメリカの五種の「赤ずきんちゃん」を中心とするもので、他に特に個性的な画家、たとえばワイルドスマイスなどの絵本を数点加えてみた。結果は絵の好みの調査結果ときわめて類似した傾向を示し、かなり細部の説明的な描写が好まれるようである。たとえば子どもがはじめてであう絵本「うさこちゃん」のシリーズで知られているディック・ブルーナの「赤ずきん」は年長児にはほとんど受け入れられず、「この赤ずきんはにせものだ」という園児さえあつた。

七 家族画

おとなと子どもの身長差をどのように表示するかについて調査するためには、前述のように同一画面におとなと子どもを描かせるものでなければならない。以前から家族画法という技法

があるので、この方法によつて調査してみた。被験児は幼稚園年少組から小学校五年生までの六十七名である。家族画は本来児童を中心とする家族関係を診断するために利用されてきた。しかし私の目的は身長差をどのように表現しているかを知りたいにすぎない。

三年生以上の被験児は十六名であつたが、ほぼ全員が身長差を表現していた。また幼稚園児でもすでに身長がちがいを區別して描いているものもある。大麥稚拙な段階にあつても身長差を表示するものもあり、逆にかなり細部的な衣服の描写を行なつたり、衣服によつておとなと子どもの相異を表示しているにもかかわらず、身長差が表示されていないものもあつた。(写真 8-11) 標本数が小さく決定的なことはいえないが、幼稚園児から二年生までは、親と子を並べて描いても身長差を表示するとは限らず、むしろ統計的には身長差を表示しないものが多いといえる。

身長差が表示されていない場合でも二つの異つた内容をもっている。一つはすべての画像の大きさがほとんど等しく描かれているもので、他は画像に大小はあるが現在の人物の大小に対応していないものである。後者の場合には当人を表わす画像が父親の像より大きかったり、おばあさんだけが極端に小さかったりする。投影法による診断ではこの種の画像の大小をそのま

写真 8

男児 (4歳) 幼、年少
左から父、弟、母、当人、
技術的には稚拙であるが、
性別身長差は表示されて
いる

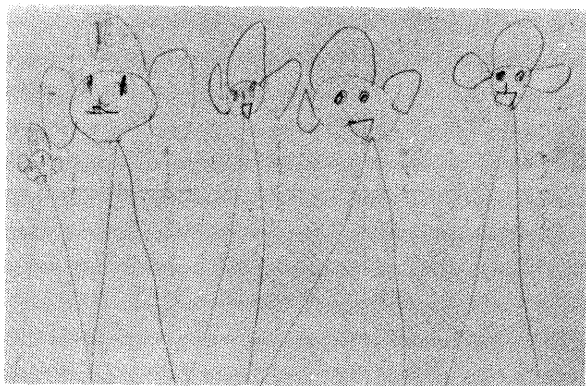
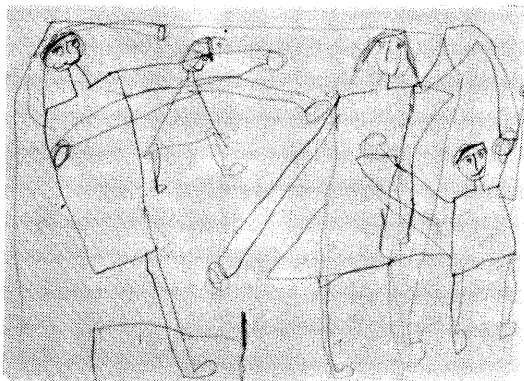
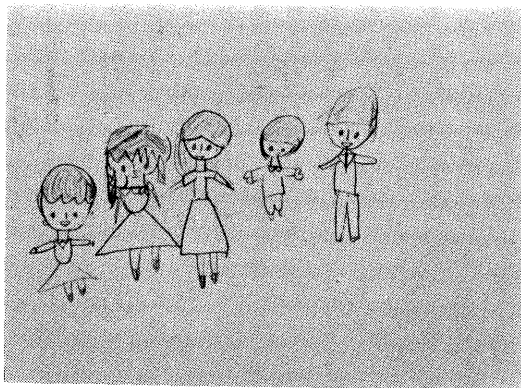


写真 9

男児 (5歳)
幼、年長
左から下の弟、父、
母、当人、上の弟
全く未分化である

写真 10

女児 (7歳) 小、1年
左から、妹、当人、母、
弟、父、不明確ではある
が身長差は認められる、
余白が多い



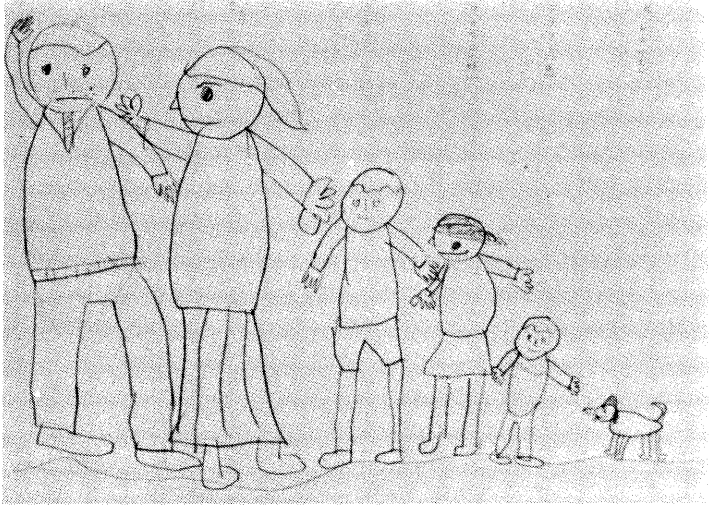


写真11 男児（8歳）小、2年
左から、父、母、当人、妹、弟、犬、年齢の順に描いている

表2 家族画における身長差の表示 描画順序

	学年	幼	1	2	3	4	5
	N	18	14	19	5	8	3
身長差の表示		5	4	9	5	7	3
描画の順序	正	2	3	6	3	2	0
	逆	4	0	6	1	3	2
	他	12	11	7	1	3	1

正一年令の大きい順に描いたもの

逆一年令の小さい順に描いたもの

ま心理的な重みの反映と解釈しているように思われる。たしかに描かれる画像の順序、大小、配置などによって、ある程度の幼児から見た家族関係を知ることが可能であろう。しかし特に年少児などは家族の人員に見合った数の画像を描くためには、画面にどのように分配してゆけばよいのかわからず、なかなかうまく構成することができない。たとえば画面の左すみから右に向かって四人を配置すべく描き始め、三人目を描きおえた段階で画面の右側にまだ広い空間があ

れば四人目の画像は太った大きな人物像を描いてしまう。逆に三人目を描いたら右側にほとんど余白がなく、しかたなしに画面の上方や下方に小さな画像を描き表わす場合もある。このように画像の大きさを操作することによって画面を一パイにしようとする傾向は年少幼児にしばしば見られるが、年長になるに従って余白の空間的条件に左右される傾向は弱くなり、画像独自のプロポーションを守るようになる。しかしその反面、画面の中央や右すみに四、五名の家族がかたまっているかのように見える余白の大きい作品も多い。これはあたえられた空間に決まった人数の画像を、どのような大きさでどこに描いていたからよいかを見とおす能力がまずしいために起こると考えてよいのではないだろうか。

八 まとめと考察

前回は幼児が男性と女性の画像をどのように描きわけるかについて述べ、今回はひきつづいておとなと子どもをどのように区別して表示するかについて考えてみた。幼児がこのような差異の表現を行なう形式は全体像的な概要を把握することによるもの、たとえば身長差の差とかプロポーションのちがいでなく、細部の特徴をとりあげて表示するかたちといえる。つまり衣服の部分とか髪形をかえてそれぞれの主題の特質、差異にあて

ている。これらの問題を明確にするために二、三の実験を試みた。

その一つは年齢を五段階に区分し、赤チャン・幼稚園児・小学生・高校生・おとなの五点を描かせた。

その二は自画像といわずら子（一部は鬼または悪魔を加えた）を課した。

これらの調査によって幼児から小学校二年生前後の段階までは、課題の特質にそった具体物を描写して解決していく表現形式がとられていることが決定的であるように思われてきた。

第三の実験は直接の描画行動を必要とする方法ではないが、単純化した図形から連続的にやや写実的傾向をもつ図形に至る五段階の絵カード五組を用意し、それぞれの一組の絵に好きな順位をつけてもらった。この結果は絵画の全体像的な把握に基づく評価ではなく、好ましい部分の有無とか構成する部分の完備の度合が評価の基礎にあるかのように見受けられた。

次に家族画によって年齢の変化に対応する身長の変化を表示しているか否かを調査したところ、幼稚園児から二年生までの五十一名中身長差を表示しているものは十八名で、半数以上が身長のちがいを描き表わしていないとい得る結果をえた。

幼児の人物画の発達には、主題の内容が漠然としたものから明確なものへと移行し、描写によって限定される範囲は漸次「的」

がしぼられて行く。と同時に主題に附加される条件が多くなる
ともいえる。たとえば最初「おかお」とか「ひと」であった人
間像は、やがてママ(性別)となり、「ママがお買物してると
こ」に変化する。附加される条件が増すたびに「ママ」なり、
「お買物」を成り立たせるための具体的な部分の描写が必要と
なる。

そのさい幼児は何をもって具体的部分としてこれにあててい
るのか……この問題についてふれておかなければならない。た
とえば「お父さん」という課題に対して、ネクタイを描写する
ことよって解決しているが、なにゆえネクタイが描かれたの
か、両者の結びつきは何を意味するのだろうか。単純な連想な
のか、シンボルなのか。それともお父さんという範疇に属する
ものとして選択され描写されたと解釈すべきなのか……等々、
一概に決めかねるし、実際いろいろの場合も考えられよう。ゲ
ッドイナッフやハリスの人物画を利用する技法は児童の概念形
成の過程を知るために開発されものと思われるが、この人物画
検査法を一つの拠点として、より分析的な研究を進めることが
今後の課題でもある。

(つづく)

幼児教育講習会予告

日時 昭和四十七年七月二十二日(土)

二十五日(火)

会場 お茶の水女子大学

講堂・体育館

主催 お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会